

題名 St James's University Hospital にて

平成 6 年卒 伊神 剛

私は 2009 年 1 月より 12 月まで英国は Leeds の St James's University Hospital の HPD and transplant. で研修させていただきました。渡英前に行ったこと最難関の事柄は家探しでした。ネットで適当な物件を見繕って不動産屋に連絡すると、『お前のかわりに借りる予定の物件を見る人物が必要だ！』と、ほぼ不可能と思われることを言われて、途方にくれつつ全く面識のない Lodge 教授に連絡をしたところ、『2,3 日中に見てくるから大丈夫！』という返事をいただき、さらに、『あんまりいい物件じゃなかったから、かわりに探した物件があるから、こっちで契約するといいよ！』と、大変親切な返事をいただき、目頭が熱くなったことを昨日のことのように思い出されます。この逸話からもおわかりいただけるように、Lodge 教授は、『British Gentleman』という言葉がぴったり当てはまる人柄を持ち合わせて見えます。

さて、Leeds での私の研修生活は、手術、外来、病棟回診の見学と MDT(Multidisciplinary team) meeting への参加、1~2 月に 1 回開かれる有志による Journal club への参加となります。手術見学は主に第二助手の位置での見学になります。具体的な 1 週間の流れとして、月曜日は AM8:00 からの肝移植の MDT meeting で始まり、膵臓の手術を終日見学となります。ここでは、膵癌、下部胆管癌の手術はもちろんですが、膵炎の多種多様な手術が展開され非常に勉強になります。膵炎で手術される患者はみな大酒豪(女性で Vodka を毎晩 1l とか)であり、私事ですが、これを見て渡英後は酒量を半減させました。火曜日は、Lodge 教授の手術日で、2-3 件の肝切除が行われます。時に、腹腔鏡下胆嚢摘出術やヘルニアを『肝切除ばかりだと緊張の連続だから、こういった手術で気分を落ち着けないとね！』と言われてご自身で行われます。水曜日は AM8:00 から放射線科医との XP の読影検討会に始まり、その後は外来をこなし、午後から予定がある場合は private hospital で Lodge 教授の手術の第一助手をします。木曜日は AM8:00 から膵臓症例の MDT meeting に始まり、終日肝切除の手術見学か肝移植の手術見学になります。金曜日は AM8:00 から肝切除症例の MDT meeting に始まり、病棟総回診が行われます。ここに書きました MDT meeting とは、外科医と肝臓内科医、放射線科医、腫瘍内科医、内視鏡医など関連する各科の Dr. が集まり、時には紹介元の先生(GP の Dr.)も参加して行われる症例検討会です。この症例検討会、油断していると、特に胆管癌症例では診断方法の選択や切除の可否、切除術式などの意見を求められるので、私としては結構真剣に画像読影しつつ参加しています。Journal club は、なぜかアジア人中心に行われており、最近発表された英語論文をみんなで議論した後に、激辛インド料理レストランでの夕食会となります。

St James's University Hospital での医師の構成は大きく分けると、Consultant(教室でいう教官)、Senior registrar(医局員)、Research fellow(大学院生)、Junior registrar(初期研修が終了した外科研修医)となっています。外来、手術、回診などの全ての診療は、一人の Consultant の下に一人の Senior registrar がついて行われ、その下に Junior registrar が当番制(一週間連続で夜勤、日勤、休みを交代する)でついて診療の手伝い

(Junior registrar にとっては研修となっている) をするというシステムで動いています。Research fellow は研究の合間に外来の手伝いや手術見学にやってきます。そんな中で、特筆すべきは、Senior registrar や Junior registrar は法律で週 48 時間以上働いてはいけないことになっていることです。Senior registrar に関しては、Consultant が許可を出すことにより週 48 時間以上の勤務が可能になるのですが、Consultant が全ての医療行為の責任を取る形になっているそうです。ちなみに、Consultant に対しての勤務時間の上限はないそうです。このため、いつも遅くまで病院に残っているのは、一部の Senior registrar を除けば、なぜか上司の Consultant で、日本 (少なくとも我々の教室) とは異なり、若い医師がさっさと帰るシステムです。我々の教室で言えば、教授や教官が最後まで残っていて、医局員や大学院生の方々が、『じゃ、あとよろしく！』と言って帰る感じになります。Lodge 先生は、この点に関しては、Junior registrar の研修が十分にできないと嘆いておられますが、Junior registrar はそんな上司の嘆きを知ってか知らずか、有り余る自分の時間を楽しんでいるようです。とはいえ、Research fellow はとても熱心で、様々な臨床系研究用検体の蓄積に積極的に参加しています。

現在こちらの施設では、日本と同様に電子カルテ化が進行しつつあり、XP は filmless になっています。電子カルテアクセス用の User NAME と ID number の取得、画像読影ソフトウェアアクセス用の ID チップ入りカードの取得がちょっと厄介 (Lodge 教授のサインはすぐいただけますが、外人に対する審査が少々厳しいかも) であり、他施設の状況は不明ですが、このような審査をフランス語やドイツ語で受けなければならないとなると、今後の海外臨床研修希望者にとって問題となってくるかもしれません。

変わった経験としては、Swine flu の pandemic の波には勝てず、罹患してしまいました。英国では、National Pandemic Flu Service という NHS のホームページから必要事項をクリックしていき、医師と全く顔を合わせない画期的な方法で診断されています。つまり、疑い例もそっこのけでタミフルを無料でばら撒いています。そのおかげで、3 日ほどで解熱し軽快しました。(タミフル備蓄量世界一だと英国のマスコミは伝えていましたが、もうかなり減ったのではないかな？)

最後にこのような機会を与えてくださった榎野教授はじめ腫瘍外科の諸先生方に心より感謝いたします。

* 本内容は同心の友 2009 年号に掲載された内容を加筆修正したものである。